

嘘八百と八百八町等

JJ1SXA/池

「嘘八百」とか「嘘の三八」という言葉がありますが、根拠があるのだろうか？と疑問に思い、グーグルで検索したら、一つの回答が見つかりました。

根拠はありませんが、由来・起源はあると思いますということで、

- 1、歴史学的解釈として、「家康が江戸の入部の際、“三河の八部”と呼ばれた連中を伴って江戸の治安を任せました。好き勝手な取り締まりをするので嘘の三八と言われるようになった」
- 2、語学的解釈として、「古の中国文献にも三と八は数が多い喩えとして使われてました。それが日本語として脈々と伝えられ、「母をたずねて三千里や八百万(やおよろず)の神の用法があります。アバウトでいい加減な数字の喩え(嘘とも言います)が嘘の三八と言われる所以」
- 3、心理学的解釈として、「とっさに思いつく数字が三と八という数字で嘘の数字を言う際このどちらかの数字が入る可能性が高いということです」

何と無く理解できたような気になりました、そこで典型的な、「江戸の八百八町(ハッピークヤチョウ)」、「京の八百八寺(ハッピークヤデラ)」と並んで「浪華の八百八橋(ハッピークヤバシ)」の全てが「八百八」なのが気になります。

江戸の町の数について年表がありました、慶長～寛永年間(1596～1644)は約300町、寛文2年(1662)は674町、正徳3年(1713)には933町で808町を超えています、そして、延享年間(1744～1747)には、実に1678町という記録がありました。

さてそこで、江戸の範囲についてだが、解釈がまちまちであった、文政元年(1818)8月に、目付牧助右衛門から「御府内外境筋之儀」についての伺いが出されました。

その内容の要約は、「御府内とはどこからどこまでか」との問い合わせに回答するのに、目付の方には書留等がない。前例等を取り調べても、解釈がまちまちで「ここまでが江戸」という御定も見当たらないので回答しかねている。」というものでした。

この伺いを契機に、評定所で入念な評議が行われ、このときの答申にもとづき、同年12月に老中阿部正精から、「書面伺之趣、別紙絵図朱引ノ内ヲ御府内ト相心得候様(シヨメシウカガイノオモムキ、ベッシエズシュビキノウチヲゴフナイトアイココロエソウロウヨウ)」と、幕府の正式見解が示されました、その朱引で示された御府内の範囲とは、およそ次のようになります。

東…中川限り

西…神田上水限り

南…南品川町を含む目黒川辺

北…荒川・石神井川下流限り

現在の行政区画でいえば、次のようになります。

千代田区・中央区・港区・新宿区・文京区・台東区・墨田区・江東区・品川区の一部・目黒区の一部・渋谷区・豊島区・北区の一部・板橋区の一部・練馬区の一部・荒川区です。

御存じ、銭形平次でも、「花のお江戸は八百八町」と歌われていますが、江戸の町は、多い時には、八百八町より大分多かったのだ。



別紙絵図・朱引の内が御府内/大江戸（墨引の内は、町奉行所支配の範囲）

前述のように、「江戸の八百八町」は実際より大分少ない数になっているが、「京の八百八寺」も実数より少ない、京都には寺や神社がやたらあって、神社がおよそ800、寺院がおよそ1700あるようで、江戸時代の正確な数では無いが、ほぼ同じであろうと推測できる、そうすると、八百八のほぼ2倍だ、それに引き換え、「浪華の八百八橋」は、実際の数より大分多い数の表示だ、当時の実際の橋の数は江戸の約350橋に対して、浪華には約200橋ほどしか架けられていませんでした、それなのに、何故、浪華が八百八橋の町と呼ばれていたのでしょうか？村田英雄の「王将」でも、「うまれ浪花の八百八橋」と歌われています、その答えは、誰が橋を架けたのかにありますとのこと。

江戸の橋は、約350で、その半分が公儀橋と呼ばれる幕府が架けた橋でしたが、一方浪華では、公儀橋は「天神橋」「高麗橋」などのわずかに12橋、残りの橋は、全て町人が生活や商売のために架けた「町橋」でした、町橋に対する幕府からの援助は無く、町人たちは自腹を切って橋を架けたのです、自腹を切ってでも橋を架けた町人たちのこの勢いが、「浪華の八百八橋」と呼ばれる所以だそうです。